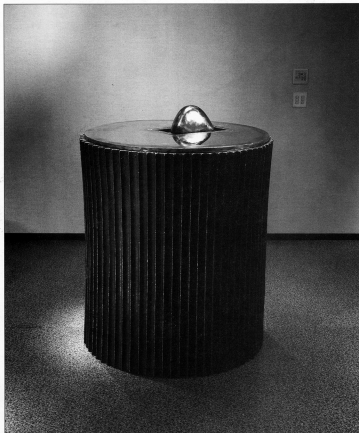


GALLERY SURGE '95 OPENING PROJECT

KOUJI HIRATO

— 生命の形態 —
SHAPES OF LIFE
9-21 Jan 1995





SHAPES OF LIFE 500m ステンレス スチール、真チエウ、銅
1994.5 アメリカ ミネソタ州 ダルース市 レイク・ブレイス・パーク

いつかは朽ち果ててゆく有機体、生命体、その栄華の時のあてやかさは私に強烈な印象を与え続ける。蔓が触手を伸ばして、物にからみついたり、空気をも掴もうとするかのよう空中に漂う姿。根が水分も求めて、地中に深く食い込んでゆく姿。増殖する為の行動を続けるこれらの姿は、私の触覚を刺激して止まない。

「時間」という次元を表現する為の手段を模索しているのだが、時間という一定の流れの中で刻々と成長し変容する、これら生命の形態を見訪める事が、何かの糸口になるような気がしてならない。

平戸 貴児

千葉 成夫

平戸實児の作品は、わかりやすいというものではない。僕にうまくつかみえている自信はないのだが、ただ、どういうわけか、見ていてわかりやすそうな部分、語りやすそうな部分においてではなく、いまひとつとらえにくいとおもわれる部分において何かを言ってみるべきだ、そういう気がするのが不思議である。これまで、彼については「時間」ということが言われ、本人もまた「時間」のことを口にしてきた。しかし、彼の作品をじっくりと見ている僕にまずやってくるのは、「時間」ではない。何か、もうすこしがうもの、もうすこしがうこと、なのだ。それを、どのように言ったらいいか？

平戸實児の作品のありのままの姿を見てみる。そのとき、いちばんはじめに、直線的に僕に触れてくるのは、形状とナクスタチャー（素材の様子）である。ここからはじめよう。彼の作品の「形状」は、さまざまである。柱とか樹木の幹をおもわせる円筒形が醸出するのが、ひとつの特徴といえそうだが、僕がここで感ずるのは、そのことだけではなく、「立つもの」と「横たわるもの」ということなのだ。彼の作品には、タテの方向の輪線をもつものと、ヨコの方向のそれをもつものとのふたつがあり、そしてこのふたつは独立にあるわけではなくてがいに関連しあっているのではないか。数からいうと「立つもの」のほうが多いが、「横たわるもの」系統のものが、あたかも彼の作品全体をまとめるのに不可欠な要素のように、要所であられてくるような感じがある。森の地下で、樹々に水を供給している水脈のごとく、「横たわるもの」がある。円筒形は立つものであり、他方、横たわるものは柱をおもわせる、というより、ここでは柱・樹木・柱などを連想させることが重要なのではなく、何かを連想させまた連想させないにせよ、立つものは柱・木などは横たわるものを宿し、横たわるものはそのなかに、

不在ながら、立つものを含んでいる、そのことが重要なのだというようにおもわれる。そして、「立つもの」と「横たわるもの」は、同じひとつの力、流れ、ひまがりの、ふたつのあらわれ方ということにはかならない。

「ナクスタチャー（素材の様子）」についていうと、ここに対比されていて、僕にまず印象的なのは、「磨かれたもの」と「磨かれていないもの」ということである。金属を磨いていくとピカピカになり、鏡面のような輝きをもつようになる。逆に磨かないまま放置しておく、たとえばサビが生じて、鉄なら鉄の物質性がひとつのあらわな姿を見せる。ただ前者もまた、磨き込まれることで、金属のもうひとつの姿を示している。と同時に、前者は磨き込まれることで金属ではないような姿をもあらわにし、後者は放置されて解体に向かっていく——という意味では、ともに自分ではないものという役割を見せているのでもある。べつのことばでいうなら、たとえば鉄という金属にたいして、磨かないで放置しておくことは、最終的には、サビでぼろぼろに崩れさせていくことであり、磨くことはその正反対の方向へと鉄を延長させようとするものなのだ。つまり、磨かれたものと磨かれていないものとは、同じひとつの物質の両端を示している。すくなくとも暗示しているといっている。

こういう形状とナクスタチャーが僕に伝えてくるものは何だろうか？

平戸實児がみずからそのなかに身を置き、また表現しようとしているのは、きっと、あるひとつの力、流れ、ひまがりということなのだ。それは自然といってもいいし、世界といってもいいし、時間といってもいい。どう呼んでもいいが、それを表現しようとする場合、そのままだとはとっかかりをつかみにくいのである。たとえば宇宙を造形によって表現しようとするとき、どうやったら



LIFE FORMS

1993.11 ギャラリー・サージ

それができるだろうか？ 一まるごとというのは無理なので、何かとっかかり、切り口が必要になるだろう。いいかえると、なんらかの特定の側面ないし断面を見せるのであれば宇宙は表現できないのだ。表現の困難として平戸真児が直面してきたのもほぼそういうことなのだ、僕はもう。

そして、そこで彼が採っている方法は、あるひろがりの両端を切り口として見せるということであり、つねに両端をはらんだ造形をつくり出すということである。つまり、彼の造形の独自性は、ひとつの断面だけを表現するのではなく、両方の端を作品のなかに取り込もうとしているところにある、そう言ってい、「定つもの」と「横たわるもの」はその両端を示すものにほかならないし、「磨かれたもの」と「磨かれていないもの」もまた同じである。

彼がそのなかに身をまいているある方、流れ、ひろがり——それは、ほんとうはひとつのことだ、ひろがり

という角度からは「空間」のことであり、流れという角度からは「時間」のことであり、力という角度からは「自然」のことである。そこに、彼は自分の身体をかく。そして、その身体を通して現われ出てくるものに、彼はたえず耳をすませ、眼を凝らしている。

じつは、平戸真児の作品をじっと見ていて僕が感じているのは、したがって感じるとのにそんなにかやすくないのは、そういう彼の姿勢、密であるような気がする。見る僕は、この彼の姿を視野と感覚のかたずみに登場させないと、彼が表現しようとしていることをつかみにくいのではないだろうか？ 「時間」ということばをつかうなら、ここにみとめられるのは「身体化された時間」であり、しかも、それは平戸真児という特定の作家の「時間」に同調されているものなのだ。

その作品を見る僕は、しらすしらすのうちに、作品におが身を寄り添わせていく——そのとき流れ出てくるものを、人はきっと時間と呼ぶのである。



SHAPES OF LIFE 300(W)×50(D)×60(H)cm 鉄、真鍮、銅、ラテックス

1994.11 ギャラリー陸

平戸真見「SHAPES OF LIFE」展によせて

ギャラリー・サージ 酒井 佳一

平戸の作品から受ける印象は、なによりもその艶やかさと堅牢さにある。けっして構成が単純なわけではなく、繊細な感覚と微妙な均衡はいつものことなのだが、磨きあげられた真鍮の黄金の光沢や、張られたラテックスの布の鮮やかな紅色が、まずわれわれに告げるのは、技術の高度な洗練と、それゆえの安定した存在感である。

近年、(現代彫刻家)平戸が生み出している作品は、一時代前の、空間をぞんざいに取り仕切る(彫刻)とは異なっている。鉄板とコンクリートで固めた支持体から、製れによって鉄線束を立ち上げらせたり、屹立する金属の円筒群を布の平面で連結したりする。その構造は、容易に、有機体としての植物の生命活動を彷彿させるのだが、そういうテーマとは別に、そこで使用される素材の扱い方そのものに、平戸の地道で勇気に満ちた(手の動き)を感じるのである。そうして、なにより、われわれは、作品の背後に漂ひ、制作に向けられた膨大な時間を、すなおに信じることができる。工芸の伝統が現代彫刻とは別の規範を有するのは当然であるが、平戸の作品には、いわば、その二者の幸運な融合が認められる。これは、革新的なことではないとしても、実現するに易しいことではないのだ。

平戸はしばしば、次のように言う。「誕生し、成長し、やがては朽ち果てて行く有機体の再現を契機として、(時間)という決定の表現を目指す。静態的な作品を空間に定着する以外の方法を持たない彼にとって、ここで言う表現が、(一瞬)の切り取り方如何にかかっているのは明らかである。しかし、平戸が意図するのは、フィルムの一コマを抜き取るような、収奪された(一瞬)ではない。ゆったりとした時の流れを受け入れて、その意識を、限り無く(一瞬)に凝縮すること、作品の空間を、不断の時間と転位すること。

ここから、彼の制作の一步が始まる。微妙に質感の異なるさまざまな金属が選択され、それらは、周列に縦く変形される。金属に括弧し得る素材や、金属を彫造するに足る布が用意され、ごつごつした平無や滑らかな曲面が、金属の鋭さにとけこんでゆく。縦、横、斜めに、作品の構成軸が決定され、見事な緊張とともに、それに背反した種やかさが空間に共存してゆく。高さ数メートルに及ぶ建造物となることもあれば、ときには、数十センチの小宇宙の瞬間という形をとることもあるが、そうして完成した作品群は、有機体の生命の(一瞬)に、密やかに呼吸していく、やがては「過去の一瞬」として、忘れ去られる、このような生命の瞬間性の定義は、あらゆる芸術が目指したことはなかったが。

平戸の営みは、その希求が素材で制限的であるぶんだけ、苦悶と実りの隔は大きいであろう。だが、彼は、制作活動において、時間の経過に対する信頼を、つまりは、忍耐というものを通じて身につけている。彼の作品の堅牢さの中に、われわれは、独特のおおらかなさを見いだす。不可能に立ち向かう、そのすくなくとった背筋を信じる。冷たく硬質な結晶を通して、われわれは、平戸の微塵みを感じ取る。

思えば、今、われわれは、われわれの時間をどれだけ細分化し、どれだけ凌辱していることか。一瞬一瞬に、われわれの身体は細切れになり、個としての全体性は誕生不可能なまでに傷ついている。平戸の作品を前にして、われわれはわれわれ自身の痛みしさを再認識する。平戸の主題が「時間の象徴」に関することであるかどうか、を問うことは、もはや大した問題ではない。平戸の作品は、われわれの生きている(時間の)彼がえの無さを教え、真なる(現在)を喚起する。この意味において、彼の作品は、紛れ無く(希望)にむけて開かれているのである。

GALLERY SURGE

ギャラリーサーフ 〒101東京都千代田区岩本町2-7-13津辺ビル1階 tel.03.3861.2581 fax.03.3861.2582

GALLERY SURGE 2-7-13YAMAMOTO-CHO,OHYOGA-KU,TOKYO JAPAN tel.03.3861.2581 fax.03.3861.2582

印刷 朝新聞社 〒115東京都荒川区西日暮里2-49-5光工芸社ビル2F tel.03.3806.5077 fax.03.3806.7050

PRINTING SHINSHUWA CO.,LTD. 2-49-5 NISHINIPPORI,ARAKAWA-KU,TOKYO JAPAN tel.03.3806.5077 fax.03.3806.7050

平戸 賢児 Kouji HIRATO 略年譜

- 1958 千葉県に生まれる
- 1982 東京芸術大学彫刻科卒業
- 1984 東京芸術大学大学院修了
- 1988 HIRATO A'TELIER 設立
- 1990 千葉工業大学講師

〈個展〉(技特)

- 1983 画廊パレルゴンII(東京)
真木画廊(東京)
- 1984 田村画廊(東京)
- 1985 ASG(名古屋)
- 1986 秋山画廊(東京)
- 1989 ギャラリー・サーフ(東京)
ルナミ画廊(東京)
- 1990 "from INSTALLATION to SCULPTURE"ルナミ画廊(東京)
- 1991 "Handy Works by Hands"ルナミ画廊(東京)
- 1992 ギャラリー・サーフ(東京)
"LIFE FORMS"ギャラリー・バレンタイン(長野)
- 1993 "LIFE FORMS"ギャラリー・サーフ(東京)
- 1994 "SHAPES OF LIFE"ギャラリー・陸(千葉)
- 1995 "SHAPES OF LIFE"ギャラリー・サーフ(東京)

〈公共施設作品〉(技特)

- 1984 広島県庁北館
- 1985 イトーピア宮羽マンション(東京)
- 1986 帯広サナリ病院(北海道)
金沢東急ホテル
- 1987 京市 久保 惣記念館(大阪)
- 1988 滝見市 埼玉県警運転免許センター
港区立藤田小学校(東京)
- 1989 TAKASU LAPUTA BUILD'(千葉)
- 1990 千葉県総合教育センター
南柏駅前ビル(千葉)
- ZEBRA HEAD OFFICE(東京)
- 1991 中日園ITビル(東京)
- CIマンション鶴見(神奈川)
- 1992 千葉県立泉高等学校
国立三田マンション(東京)
- 1993 東急崎台ガーデンオフィス(神奈川)
- 1994 ダルース市レイタサイドパーク(USA ミネソタ州)

〈グループ展〉(技特)

- 1981 千葉県新進作家展(船橋西武)
- 1982 第34回 千葉県美術展(千葉県立美術館)
- 1983 "Exciting Sculpture"(神奈川県民ホール)
- 1984 第15回日本国際美術展(東京都美術館・京都市美芸館)
「樹と邑の美術展」(倉敷市立展示美術館)
- 1985 「万象の変様-37の美術表現」(埼玉県立近代美術館)
"HOT HOUSE EXHIBITION"(所沢西武)
- 1987 「硝水の兆候」画廊パレルゴンII(東京)
- 1988 「コレクションIII」画廊パレルゴンII(東京)
「コレクションIV」画廊パレルゴンII(東京)
- 「大谷地下美術展」宇都宮市大谷地下資料館(栃木)
- 1989 "OPEN AIR EXHIBITION IN WANPAKU 1989"わんぱく王国(千葉)
- 1990 「検証、そして・・・」(千葉県立美術館)
- 1991 "LUNAMI SELECTION"ルナミ画廊(東京)
- 1994 "Contemporary Works'94"東急日本橋店 美術画廊(東京)

表紙 LIFE FORMS 110(W)×110(D)×140(H)cm 鉄、銅、ステンレス スチール、ウレタン製陸

1993.11 ギャラリー・サーフ